



# 神奈川県重症心身障害児(者)を守る会

ホームページアドレス  
<http://kanagawa-mamorukai.org/>

第21号 2017/1/7日発行



## 巻頭言

会長 伊藤光子

神奈川県重症心身障害児(者)を守る会は、昭和41年に設立され今年で50年をむかえました。

今日まで50年、長きにわたり運動が継続できたことは、設立以来ひたむきに重症児者に向き合って、活動をされてこられた先輩のみなさまのお力があってこそと、心よりの敬意を表します。

また、この50年を期に、こころ新たにさらに運動を展開していくことを誓い創立50周年記念式典の催行と、記念誌の作成を計画しました。

そして、去る十月二二日、健康福祉総合センターにおいて、ご来賓百名をお迎えし、式典、基調講演を開催いたしました。

式典には、県の中島副知事はじめ多くの行政関係者、重心施設、特別支援学校、養護学校、さらに全国を守る会、支部のご来賓の他百名を超える会員の方がおいでくださいました。

施設入所者2名も車いすで参加されました。会員の中には、杖をついたり支えられたりしながら来られた方もおられ、その姿に胸が熱くなりました。

この大会の施行を決めた時、準備に当たる役員や会員の高齢化、大変厳しい会の財政の中で果たしてどのような大会になるのか不安がよぎりました。

しかし、多くのみなさま方からのご寄進や、助成金、そして心ひとつにして力を発揮してくれた役員会員の汗で、その不安も払拭されました。

この結束力を以て、今後も心新たにして会活動に当たっていただけることを確信しております。

開催後、「本当に素晴らしい式典だった」「心打つ講演に感銘を受けた」と多くの称賛の声を戴き、改めて感動に浸っています。

また、記念誌においても、50年の軌跡を辿り、こころゆたかな未来に向けて、多くのみなさまがご寄稿くださり、会心の記念誌に出来上がりました。

全ての人の心に残る「幸せへの近道」という素晴らしいご講演をいただきました江川文誠先生、重心協やヒューションコムなどのみなさまに心より感謝申し上げます。

# 神奈川県重症心身障害児(者)を守る会創立50周年記念式典を振り返って

賛助会員 常盤正臣

10月21日(金)、好天に恵まれたとは言え外は寒い。

そんな中での駅や交差点での案内係は大変だ。会場前では振り分け担当が、そしてご来賓、福祉施設、行政、学校等に区分されたそれぞれの受付係、更には控室へのご案内係がその任に備えている。

一方、式典会場では、中央のメイン看板の設置や演台、花台そしてご来賓の椅子の位置確認作業等に熱心に当たっている。

開式30分前から完璧なまでに準備し尽くされた会場には、ご来賓はじめ招待客、そして関係者の皆様がぞくぞくと入場された。

どなたも「50周年おめでとう」「おめでとう」と笑顔、笑顔、笑顔のご来場である。

これらすべての役員諸氏の行動は役割分担が明確であり、それぞれが自分の役割を見事なまでにこなして誠に組織立った立派な活動ぶりである。

神奈川県の中島副知事や神奈川県社会福祉協議会の石黒常務理事をはじめご来賓、ご招待客が席に着かれた。

司会から式典の前に「神奈川県守る会」の紹介動画の放映の案内があり、みなさんは舞台中央に大きく映し出される画面に見入った。

相模原療育園の渡辺和哉氏制作の動画は7～8分の短編ものであるが会の活動内容が分かりやすくまとめられ特に渡辺氏自らのナレーションはプロ顔負けの素晴らしいものであった。

次の式場づくりも打ち合わせ通り6～7人のメンバーがあっという間に舞台上にその姿を作



り上げ総合司会の吉田副会長と岡村さんのご案内でご来賓の方々が舞台上に着席された。

時刻となり式典のスタートだが会式に先立って「津久井やまゆり園」の犠牲者の方々への黙祷が行われ全員でご冥福を祈った。

いよいよ開式である。

主催者代表伊藤会長が大きな拍手に迎えられ壇上に立つ。「心新たに」のテーマのもと”重症児者の明日を思う”と題しその思いを語った。

平成20年に会長就任以来8年間の活動の中で、先ず手がけたのは停滞していた活動を改め、会員の心を一つにする新体制を確立、会報の再刊、学習会、他団体との交流、ピア相談会、安心ノート作成、そして県や県下33市町村すべてへの行政訪問を実施し県内の重症心身障害児者の実態を把握するなどの活動を力強く語られた。

その言葉には会長の重症心身障害児者を心底から思う優しい人間性と会の将来を切り拓かんとするリーダーとしての強靱な心が現れていた。そしてご臨席者とすべての関係者に対しこの50年間のご支援、ご協力に感謝し今後のご協力をお願いし締めくくった。

続いて神奈川県中島副知事をはじめ数人のご来賓の方々からご祝辞を頂いた。頂いたご祝辞で異口同音に述べられたのは「神奈川県守る会」の、会員の気持ちに寄り添う熱意と世間の理解を求め課題に取り組む姿勢に対する称賛の言葉であった。

また式典で主催者側として80名を超えるご出席者全員を呼名紹介したことは大変であったがご臨席された方々への大事な“おもてなし”





であると感じた。式典は厳かな中にも整然としていて中身のある温かな雰囲気につつまれた式であった。

第2部講演は江川先生の医師の立場から障害者本人への対応と周囲の支援者としての支援のあり方がブレインの方達のパフォーマンスによって分かりやすく演じられた。

私は開会前、受付周辺の捌きを受け持ち、閉会後はお帰りになる方々をエレベーターまでお送りする役割をさせて頂いた。約15分程度の合間で会ったが誠に素晴らしい言葉をたくさん耳にした。それは参加された方々からの感想であった。

「ほんとうにいい式典だった、まとまりがあった」「来て良かった、とても参考になった」「他の周年行事とはひと味違っていたな」「さすが神奈川だ」などなどが耳に入った。

この日を迎えるまでの2年間 伊藤会長を中心に副会長、事務局長、そして役員のみなさんが心ひとつになり総力を結集し綿密な計画で作りあげた素晴らしい式典であったのだと思う。

私がこの様な第三者の心持で感想を述べたのは私たちの娘が重症心身障害児者として会員の皆様のお子様たちの仲間として長い年月お世話になったからですが、娘は、一昨年（平成26年）7月容体が急変し8月に旅立ちました。

その後2年間夫婦して真に空虚な思いで過ごしておりました。

みなさまから温かい気遣いを頂いておりましたが娘が居なくなつての役員会への参加は場違いの様な妙な心情が働きあまり協力することが



出来ませんでした。そんな気持ちからみなさんが作り上げたこの50周年記念行事の成功に心から拍手を送りたいと思った。

そして最後になりましたがこの50周年記念行事のもう一つの輝きは記念誌であります。

まず品のあるうぐいす色の表紙、20人もの方々の祝辞文そして目次を追っていくと「第一章の50年の振り返り」をスタートに「沢山の方々に支えられた」こと「命の尊さ」「大勢の家族の思い」や「今後の施設のありがた」そして「守る会のこれからの活動と使命」へと続き、ほんとうに深く分かりやすく神奈川県守る会の心が盛り込まれている傑作でありました。

常盤正臣氏は、守る会の中心的役員として活動頂いておりました。文章にもありますように子供さんがご逝去されてからも引き続いて守る会活動に精力的にご支援くださっています。

## 創立50周年記念式典に参加して

相模原療育園 生活支援員 金澤 英実



このたび、神奈川県守る会創立50周年記念式典に参加させていただきました。私は式典などに参加する機会がほとんどなく、当日まで緊張で胸が張り裂けそうでした。今回は同じ施設の神奈川県守る会会長の伊藤さんの娘（まゆみ）さん、増田まち子さんとご一緒させて頂きました。会場に着くと守る会の方が案内して下さり皆で一緒に食事しました。すると近くで食事をされていた女性より「もしかしてまゆみさんじゃない」とお声を掛けられ、「そうです」と答え

ると「養護学校で一緒だったのよ～」と言い、懐かしさと久しぶりの再会に喜びを感じているようでした。その後も会場に入ると「まゆみさんだよね～」「全然変わらないわね～」「元気だった」等色々な方に声を掛けられますが、まゆみさんは恥ずかしかったのか、照れながら目を合わせないようにしていました。私は「多くの方に支えられて生きてきたのだな」と感じました。式典が始まり伊藤会長が壇上に立つと、まゆみさんは大きく口を開け、手を伸ばして喜んでいました。

式典の中で座談会の写真があり、印象が強かったので、すぐに記念誌を手にとって読みました。内容は「医療・看護・療育を保護者の立場から思うこと」で、オムツ交換の事から延命医療について色々と考えさせられるものばかりでした。

私が就職してから8年になりますが、利用者が体調を崩したり、亡くなられる場面も見てきました。そのなかで日常生活を毎日一緒に過ごしている職員の汲み取る力・「いつもと違う」と

いう感覚はとても大切であり、職員が持っている情報と保護者の方が持っている情報を合わせて利用者のQOL向上を目指していく事が重要だと思っています。

この式典に参加し、また記念誌を読んでいて気付いた事があります。それは保護者の方の高齢化です。利用者の幼い頃の思い出や、好きな事や好きな物など、私達職員には知り得ない貴重な情報や親子のふれあいを沢山重ねている保護者の方がご高齢になられている事は、今後様々な問題が生じてくるかもしれません。私達職員は利用者の事だけでなく、ご家族の方への配慮も生活支援（療育）の一部だと捉え、今後はより一層考えていくべきだと思いました。私は、利用者の方は勿論の事、保護者の方も「この施設で良かった」と思われる施設を目指して今後も寄り添い、努力していきたいと思っています。

素晴らしい式典にお招き頂き、本当にありがとうございました。

## 五十周年記念式典 記念講演の思い

川崎分会 深田キミ子

神奈川県重症心身障害児（者）を守る会の五十周年記念式典・講演会が横浜市健康福祉総合センターにて開催されました。最初にやまゆり園で尊い命を奪われた皆さんに心からの哀悼の意を捧げ黙祷をし、再びこのようなことがおこらないようお祈りしました。

次にビデオで県守る会の活動を見て頂きました。

伊藤会長の開式の挨拶、続いて神奈川県中島副知事の心に響くご祝辞と「ともに生きる社会かながわ憲章」の発表がありました。副知事は「やまゆり園事件」発生の悲しみを力に、ともに生きる社会を実現すると力強く宣言され感銘を受けました。また多くのご来賓の方々にもご祝辞を頂きました。

記念講演は、ソレイユ川崎施設長江川文誠先生「幸せへの近道」。先生は、学生時代にボランティアで障害の人たちとの出会いが医療 福祉に携わることになった体験を話されました。障害のある家族と共に生きることは困難であるが、その日から奇跡が始まり苦労はするけれど決して不幸にはならないという、お話に心を動かされました。



次に実例の発表がありました。

- ・「サルビア」 BSL トレーニング（一時救命処置）チームワークで命を守る成果
- ・「朋」 本人の思いを実現する支援とは
- ・「ライフゆう」 ありのままの生活 その人らしさ
- ・「ナイア」 ドルフィンヒーリングプログラム（障害のある人もない人も、誰でも参加でき



るハワイの旅がコンセプト) ハワイ旅行の体験

部門に携わるスタッフの皆さんが、声なき声によりそい表情、しぐさを見つめて受け止めている様子に、熱意がひしひしと伝わって来た発表でした。

故糸賀一雄先生の「この子らを世の光に」—自ら輝く素材を見出すことが出来るのも、多くの方々の温かい手 優しい眼差しのもとで光が

見えてくるのだと思います。記念誌「いのちゆたかに」は、医療 福祉に携わって下さった方々、当事者のみなさんの思いがこぼれだす50年の足跡が綴られています。

式典は、大勢の方々のご支援のもと盛大に執り行うことが出来ましたことを心から感謝申し上げます。

## 神奈川県重症心身障害児(者)を守る会創立50周年を迎えて

副会長 吉田昭寿

去る10月21日(金)午後1時半から横浜市桜木町にある横浜市社会福祉センターで県守る会創立50周年記念式典が開催されました。また、記念事業として50周年記念誌「いのちゆたかに」を発刊いたしました。

重心児者達またその親たちの環境は、色々要望を抱えているとは言うものの50年前の時代を振り返ってみると現在のそれとは雲泥の差があると言わねばなりません。

全国重心守る会の運動と並行して神奈川県守る会の運動がありました。多くの先輩方が「この子たちの為に」と骨身を削っての運動が、資料は少ないながらも先輩方からの証言をもとに記念誌「いのちゆたかに」がまとめられました。



進むべき道を見出ししていかなければならないのではないかと考えます。

記念誌「いのちゆたかに」を読んでいただきたいと思います。

記念式典には、ご来賓 約100名、会員・賛助会員約100名と200名の方々の参加を頂きました。ご来賓には、神奈川県中島副知事をはじめ横浜市、川崎市、相模原市、小田原市、海老名市の福祉関係幹部職員、県特別支援学校の校長先生方、県児童相談所所長、県社会福祉協議会、入所施設、通所施設の理事長、施設長、また守る会活動を財政面で支えて下さった企業、篤志家の方々等まことに多くの方々のご参加を頂きました。

感謝を表すための粗酒粗飯を差し上げるでもない、格別の記念品がある訳でもなく忸怩たる思いがありましたが、かくも多くの福祉関係幹部がお集まりくださり50周年を言祝いくださったことに心底感謝しました。

50周年を節目にまた新たな活動を始めたいと心に誓った式典でした。



この先、社会福祉は難しい局面を迎えると言われています、我々に、今、何が求められているのか、何をしなければいけないのか、それは先輩方によって培われてきた知恵をかみ砕いて、その上で自分たち一人ひとりがおかれた現実と

守る会は子供の幸せを願って会員一同頑張ってきましたが、振り返って見るとなんと多くの方々の支えがあったことか、この事を肝に銘じ、

当会のホームページから



「あんしんノート」(ハンディ版)がダウンロードできるようになりました。外出時に携帯できるように、必要と思える基本情報を記入しておけば、保護者の緊急時に、このノートを他の人に見てもらえば重心児への適切な対処が出来るようにしておきましょう。是非、ご覧下さい。



編集後記

2016年を振り返ると色々なことが起こりました。4月に「熊本地震」が起こり、7月に起きた「津久井やまゆり園事件」では元職員の男が刃物を持って侵入し、抵抗もできない入所者19人が刺殺され、入所者と職員の計27人が重軽傷を負いました。

辛い出来事に心を痛めました。

「津久井やまゆり園事件」を起こした犯人の「障害者は不幸を作ることしかできません」と自分の凶行を正当化しようとした身勝手極まる考えは断じて許すことはできません。

しかし、「障害者」「不幸」の考え方は社会に於いて普遍的な意識として根付いていることは残念ながら、否定できないのではないのでしょうか？

私たち「親の会運動」は「不幸」の同情を求めることではなく、どんなに重い障害があっても一人一人の個性があり、いのち豊かに生きることの尊さを伝えることだと思えます。それが「社会の共感を得る」ことではないのでしょうか？

川崎では毎年、県支部と本部の協力を得ながら「療育キャンプ」を実施しています。ここに集まる学生ボランティアさんの中には重い障害のある方たちとのふれあいを通じて卒業後に「福祉」の道に進む者もいます。

卒業して一般企業に就職した後も「療育キャンプ」を楽しみに参加してくれる若者もいます。

また、私が15年以上参加しているボランティアの会では今年、そこで出会った若者が二組も結婚しています。本当にうれしい出来事でした。

「障害者は不幸を作ることしかできません」ではなく、「障害者は幸を作っている」と事実は語っています。

今、社会は自国や自分のことだけを優先する傾向が強くなっていると感じます。

争いや排除が強まることよりも、相手をよく理解し、共生の道が広がることを願っています。2017年は、私たち「親の会運動」の真価が問われていくことになると感じています。

編集員 山崎